

## 3つの立場での川との関わり

Relation with the river in three situations



一般財団法人国土技術研究センター  
河川政策グループ主席研究員

なかむら だいすけ

**中村 大介**

Daisuke NAKAMURA

### 1. はじめに

この機関誌「河川」に投稿できるという光栄な機会を与えていただき、公益社団法人河川協会及び関係者の皆様、職場の上司・同僚に大変感謝しております。

さて、私は、千葉県庁から財団法人に出向している身であるため、本稿では、個人、河川管理者、財団法人といった3者の立場から川とどのように関わってきたのか、ご紹介させていただきます。

### 2. 個人としての川との関わり

私の生家のすぐ脇には、なんとと言うことのない三面張りの水路が流れていましたが、切梁の上を渡って近道するのに通る程度で、中学生までの河川・水路とは、ヘドロが溜まって悪臭を放つ汚い処といった存在でした。

その後、高校から駅に向かう矢那川沿いは、カップルが手をつないで歩いたり、二人乗り自転車で下校するゴールデンルートとなっており、「早く彼女を作って、川沿いを二人して歩きたい…」と強く思ったのは言うまでもありません（結果はご想像にお任せします）。

もちろん異性と歩くというそれまで経験したことのない要素も大きいながら、ただ下校するという極めて単純な行為を、河川という舞台装置がドラマチックに演出している分もあるのではないのでしょうか。

さて、社会人になった後、隅田川沿いに引っ越すことになり、町内会の青年部に所属しました。隅田川は墨堤の桜が有名ですが、花見の時期になると、吾妻橋から桜橋にかけて御茶屋さんが建ち並び、大層な人で賑わいます。左岸側の茶屋は、地元がそれぞれボランティアで運営しており、値段も良心的なのでオススメです。

下町方式で行われているミズベリングの一つと考えることができるかも、と個人的に思っています。



隅田川沿いの桜祭りの様子

ここ数年の話としては、趣味の話で恐縮ですが、34歳の時に運動不足解消のためにランニングを始めました。

隅田川はまさにランナーにとっては天国で、広い幅員のテラスを、車も気にせず、信号で止まることもなく、何より、市街地の中で水辺といった自然を体感できる代えがたい存在です。特に朝焼けと日没前のマジックアワーの時の美しさは本当に贅沢な気持ちになります。

ランニングやウォーキングのブーム、またオリンピックやミズベリングをうけてか、近年では隅田川の橋梁や護岸沿いのライトアップも行われたり、今まで通れなかった橋梁下部のテラスが通れるようになったりと一層魅力が増してきました。

このように、ランナーは水辺を喜んで走るという生態をもっていますが、2016年時点で、週1回以上ランニングする人は推計467万人もいるそうです（笹川スポーツ財団調べ）。

仮に一度に5km走ると仮定すると、年間のべ12億km（＝467万人／週×52週／年×5km／人）となり、日本で最も長い信濃川の約330万本分に相当します。そこで、ランニングの副産物として作成される走ったルートやGPSログや写真などのデータを収集し、河川点検や汀線測量の補完に役立てられないかなどと妄想しています。

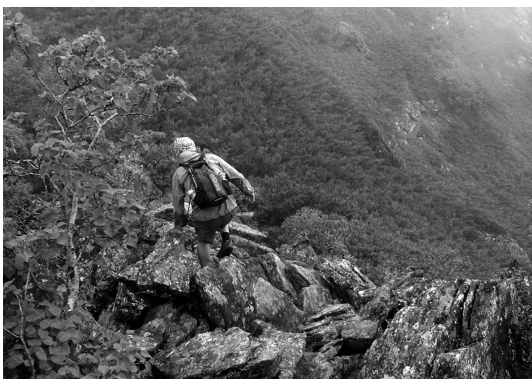


隅田川テラスでのグループラン

また、旅先でのランニングも楽しいものです。自分の足で廻ることにより、それぞれの流域ならではの河床材料や流況、植生、橋梁などの構造物、周辺の街並みや山岳などをじっくり目にすることができます。

例えば、千葉県であれば、印旛沼流域を縦走するコースがオススメです。利根川の合流点から長門川、鳥類のサンクチュアリのような北印旛沼、人工河川ながらも渓谷のような景観の印旛捷水路、西印旛沼に入るとオランダ風車と花畑があり、住宅地を流れる新川から水資源機構が管理する大和田機場を超えると花見川、再び渓谷の中を抜けると、一気に都会的な景観の幕張新都心を経て、東京湾へと至ります。

他県でもたくさん素晴らしい河川がありますが、特に印象的だったのは、南アルプスの地蔵岳に登った後に、信玄堤に行った際に、「あの急峻な山々から流れてきた水が出てくる所だから、凄い勢いに違いない。その勢いをうまく弱めるために、信玄公は、高岩にぶつかけたり、霞堤にしたりと、苦労したんだろうな。」と、時空間的なつながりに何故かとても感激してしまいました。



鳳凰三山・地蔵岳からの険しい下山ルート

### 3. 河川管理者としての川との関わり

入庁後4年目から、都県境を東京湾に向かって流下する（東京から見てディズニースリゾートのすぐ手前の）旧江戸川を担当させていただきました。

河口部の舞浜地区における緩傾斜堤整備と、船宿の屋形舟や釣船が密集する当代島地区における耐震整備、古くは常夜灯のあった船着き場における背後地の公園と一体となった緊急船着場整備などが挙げられますが、特に2つ思い出があります。

1つ目は、2006年8月14日、盆休みをいただいてノンビリしていたところ携帯電話に連絡があり、「旧江戸川を渡河する高压電線に、工事用のクレーン船が接触して、首都圏を中心に大停電を起こしている!!! どの工事がすぐ確認しろ!!!」とのことで、全身の血の気が引くのが分かりました。結果的にウチの工事ではありませんでしたが、その後、船舶の搬出入には非常に気を遣いました。

2つ目は、当代島地区における耐震整備で、設計を担当した後、10年後に再び戻って最終工区の工事を担当しました。工事期間中も船宿の営業継続を希望されていたため、玉突き式に連鎖する仮係留の調整を図りながら、一般競争入札の手続き期間や非出水期施工などの工程管理との折り合いをつけるのに尽力しました。



事業前の旧江戸川・当代島地区（向かって奥が千葉県）

それから5年間は都市計画・区画整理の担当となり、まちづくりの視点から河川を見る事となりました。当時、河川と都市の分野間のギャップを感じる事もありましたが、土地利用制度、市街地開発などの知識を身につける貴重な機会となりました。（この際に、「建設／都市および地方計画」と「総合技術監理」の技術士を取得）

しかしながら、やはり河川に関わりたいという想いから、「建設／河川、砂防及び海岸・海洋」の技術士を取得したところ、その想いが通じたのか、翌年、本省河川環境課に派遣となり、河川環境整備事業やかかわまちづくり支援制度などに関わらせていただきました。

千葉県に戻ってからは、印旛沼流域水循環健全化（水質改善、生物多様性、地域活性化などの水に関する総合対策）に3年間没頭し、印旛沼流域水循環健全化会議の運営を行いながら、マスタープランの見直しと次期行動計画案（後に、水循環基本法施行を受けて、流域水循環計画に認定）の作成を担当しました。

印旛沼は、全国指定湖沼水質ワースト1（H29.12環境省）となっていますが、①水容量当たりの流域人口が他の代表的な湖沼の数十倍から数百倍（相対的に汚濁負荷源が多い）、②上水、農水、工水と膨大な利水があり、水位を固定せざるを得ない、③干拓等の開発により水が流動しにくい形状、といった宿命に起因しているところがあります。また、外来種の移入やまちづくりとの関係など、湖沼内だけではなく、流域の全関係者による総合的な取り組みが必要です。

そこで、流域総力戦を推進させるために、行動計画に「連携」と「広報」を位置づけ、河川管理者の領域を半歩踏み出して、様々な関係者との連携を模索しました。

- ①洪水時に排水ポンプ運転に支障を及ぼす特定外来生物の協働駆除（4年間でのべ約1700人が参加し、観察管理レベルまで移行）。また、増えすぎた水草を化粧品として商品化に乗り出す企業も出現。
- ②鉄道会社と連携した印旛沼ウォークイベント。1日で約1500人参加。併せて印旛沼総選挙を行い、かわまちづくり計画作成に活用。
- ③真面目な事を楽しく伝える媒体・印旛沼ヒーロー・スゴインバーの誕生。まさかの実写化で流域内の各種イベントやマラソン大会等で広報。
- ④水質改善に役立つエコ人参を地元農家ヒーローカード付き（スゴインバーはレアカード）で販売。日経新聞やデイリーポータルZ等に掲載。

これらは一部の例ですが、様々な人と一緒に、自分自身でも水循環健全化を楽しむことで、それを見ている人に「面白そうかも」と思ってくれるようにと心がけました。



印旛沼沿いのマラソン大会での広報

#### 4. 財団法人としての川との関わり

昨年度から現在の職場に在席し、河川や海岸、防災に関する検討などの業務を担当させていただいており、これまでの施策や全国事例の収集整理を踏まえ、課題の抽出やその対応方針案の提案、手引き・マニュアルの改訂案の作成などを行っています。

この中で、減災に関する土地利用の検討については、まちづくりを担当した経験が多少なりとも役に立ちました。上司からは、「河川以外の様々な事についても勉強すべきである。広くなければ、深くならない。」と言われていますが、そのように努力したいと思った次第です。

また、業務の関係で、国内の様々な河川に足を運ぶ事がありますが、自治体職員ではなかなか経験できない貴重な経験となっています。

また、弊社では、新たな施策のタネを模索したり、研究機関との情報共有、人的ネットワーク形成などを目的として、いくつかの自主研究を行っています。

今年7月には、中国・四国地方をはじめとした広域にわたり西日本豪雨災害が発生しましたが、自主研究として岡山県及び愛媛県の現地調査を実施しました。

私も、岡山県の調査に参加し、小田川破堤点や流体力による家屋の被害状況、5mを超える浸水深となった真備町中心市街地、工場爆発による二次災害を受けた総社市など、激甚な被害状況やいち早く復旧した大型小売店などを目の当たりにしたところです。

国道や鉄道沿いにおびただしい水害廃棄物が仮置きされており、これらの発生量が何万トンとか、経済被害額が何億円といった定量評価方法もありますが、一つ一つの家財に思い出や愛着があって、それらが喪失してしまうという事にも着目すべきではないかと思いました。

なお、詳細については、弊社HPで調査報告書を公表しておりますので、よろしければご参照ください。

(<http://www.jice.or.jp/reports/disaster/12>)



道路沿いに積み上げられた水害廃棄物（家財）

#### 5. 終わりに

このように異なる立場からの川との関わりについて、ざっくばらんに書かせていただきましたが、アクティビティを楽しんだり地域資産として活用する側面と、洪水等によるリスクをマネジメントする側面の両方合わせて川との関わりであり、それらをひっくるめて、これからも川のファンでありたいと考えています。